

わたしのゴルトベルク変奏曲

十勝医師会
大樹町立国民健康保険病院

いわぶち としき
岩 渕 敏 樹

グールドの歳をとうに上回った。彼が早世したという実感が哀しい。カナダ人のピアニスト、グレン・グールド（1932-82）は、誰からも鬼才と認められている。加えて変人で、30歳前半で演奏会を引退し、その後はレコード録音に執心した。代表作は、JSバッハのゴルトベルク変奏曲である。

2つのアリアと30の変奏からなるこの曲は、不眠症に悩む貴族のために演奏されたという。グールドは、22歳と49歳の時にこの曲を録音した。その2度目の録音のすぐ後に、急な脳卒中で亡くなったのだ。

後者を学生時代から大切に聴いている。ひとりの夜に少しのアルコールとともに心を整えたりと、場面場面で助けてもらっている。勿体なくて気楽には聴けない思いもある。最初のアリアが始まると、もう心は弾み、熱い気持ちが蘇る。変奏の展開とともに次々に想いは巡り、やがて沈思の時間が訪れる。美しく、力強く、人生の機微を表現するように、ページが捲られていく。

グールドはこの曲を、始まりも終わりもない、旋律やリズムからの自由と述べたという。

バロック音楽と思えない型破りな演奏なのだが、反面細部まで練り上げられている。

緻密な計算で準備されたうえに、神秘の力で醸された精妙な酒のように。

後に最初の録音のCDを手にとった。アルバムジャケットのグールド自演のヤラセ風ポートレート集が楽しいし、若い頃の彼はどうだったのかな、という軽い興味からだ。

テンポの速さに違和感を感じたのは束の間、瑞々しく柔らかな音の輝きに魅せられてしまった。飾りなくシンプルに美しい音が転がっていく。こんなふうに日々を生きられたらな、と素直にそう感じた。より多くの幸せや豊かさを希求するあまり、人は今を見失い、心を荒ませている。春の光の中をスキップするように、無心で日々を過ごす。美しいものを見逃さず、懐かしい日々を愛おしむのも忘れない。それで良いじゃないか。力を抜いていこう。グールドは、音色の中で語りかける。

2つのゴルトベルクは全く違った顔を持っている。そのどちらも大好きだ。

遺作となった作品を何度聴いても、死を前提としたものとは思えない。あくまで前向きだ。グールドがもし70歳まで生きて3度目の録音があったなら、彼が老いや病を意識したら音楽はどう変容したのか？

彼のレコードには必ずと言って良いくらい、唸り声のようなハミングが録音されている。ほぼ雑音の聊か調子はずれなハミングが今では愛おしい。無心の演奏とは切れない関係性なのだろう。滑稽なほど物事にのめり込むのはとても素敵なことだと思う。

天才や鬼才と言われているが、音楽と向き合う実直な態度を知るにつれ、すいすいと軽く生きた人ではないことがわかる。ひょっとして、或る部分では「歌えない小鳥」だったのかもしれない。型にハマった中で、個性を追求することはとても苦しい。他人の評価も心外なほうが多い。変わり者で良いから自分の信じる道を進みたい、日々重たい足枷に苦闘していても、快活で美しい世界を表現していきたい・・・。

グールドの年齢をとうに過ぎても、わたしの変奏曲も続いている。

さあ、今日はどんなゴルトベルクにしようか。

